

京都大学	博士(文学)	氏名	森 雅 子
論文題目	周作人 — その感性の深層		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>明治の末、兄魯迅に伴われて日本に留学した周作人（1885～1967年）は、日本の文学、文化、思想、風俗にいたるまで精通した。それらはたんなる知識としてだけでなく、ことばという面においても彼の文体——とくに中国語の口語自由詩である白話詩にまでも影響を及ぼしている。戦前、多くの日本文学者と交流を持ち、中国における日本文学の紹介の第一人者と言ってもよい周作人の作品は、わたしたち日本人にとってもっとも身近にそしてどこか懐かしく感じさせる中国の文学であろう。しかし彼は日本に於いて日本の文化を摂取したと同程度或いはそれ以上に、西洋の文学・思想を吸収し、いわゆる近代的精神を自己のものとして、それを武器に中国の近代文学の確立に、兄魯迅たちとともに大きく寄与した。その成果は特に散文の領域において顕著である。</p> <p>彼は東京で或いは北京の苦雨齋で、中国、日本の文学や思想のみならず、西洋の書物を渉猟し、ギリシャに、イギリスに、アメリカに師をそして友人を見出す。そしてその友人たちの言説を、自分の文章に煩瑣とも言えるほどに引用する。引用——「文抄公(写し屋)」であるということ、これが周作人の文章における大きな特徴である。</p> <p>さまざまな時代、国の作家、思想家の言説を引用するから、周作人の文章を通じてそれらに触れることができるという点も魅力のひとつである。一見すると、ただ他人の文章を引用しているだけに見える。だが、たんにそれだけでは終わらないというのが、周作人の文章に隠された最大の特徴であることを看過してはならない。文を抄(うつ)して自己の文章を編み出すうらに、自分自身のことを表立っては語らない周作人の真面目が隠されていることがままある。引用というだけでなく翻訳も基本的には同じスタンスである。周作人は外国文学、思想の中国における翻訳紹介の第一人者でもあるが、社会的には新しい言説の紹介になっても、その翻訳自体が、彼自身の個人的な問題を語る場合があるということを見逃してはならない。そういう観点からみれば、引用も翻訳も、自己の代弁として周作人は自分の文章に織り込んだということを指摘することができよう。</p> <p>本論文では、周作人を歴史的、政治的、思想的という方面に拘って捉えようとはせず、周作人の感性という点に着目して論を展開することを試みた。そしてその感性に着目する上で感じ取れるのが、彼の文体から滲み出るある種の感情——それを生み出すことになる性的蹉跌やコンプレックスが、代弁としての「引用」という形で表れたのではないかということについて考察する。本論は、主にそういう視点から周作人の</p>			

文章を読み解こうとしたものである。

テーマは大きく分けて二つに分かれる。第一部は周作人と性、セクソロジーとの関わり合いについて、第二部は、周作人とその文学、とくに彼の悲哀への感応についてである。

第一部では周作人と性を問題とする。

第一章では周作人の文筆生活の初期に焦点をあてる。晩清、梁啓超の流れを汲む女性論によって世に出た周作人だったが、彼が生涯書き続けた「新しき性」としての「女性」への注視——もっともそれらは学問的な体系としてはのこされなかったけれども——が、いったいどのような契機で生まれたかということについて、梁啓超主宰の女学雑誌『女子世界』に周作人が一連の女性論を女性の筆名を使って書いたこと、後年の随想、詩、回想録などを手がかりとして、そこに青年期における実らなかった初恋相手の女性の影があることを明らかにした。ひそかに思いを寄せた、封建社会に押しつぶされ死んでいった名もなきか弱き女性——その女性を救えなかったという個人的な体験があったからこそ、直接的な問題として周作人のなかに女性問題への注視が萌芽し、一生の問題として捉える契機になったのである。また『女子世界』十四・十五期に発表されたコナン・ドイルの小説 *Man from Archangel* の翻訳「荒磯」は一見するとたんなる翻訳物でしかないが、実はこの一編が彼とその女性の恋の一部始終を仮託したものであること、後年の「娛園」や詩では穏やかにしか語らないその恋が青年期の周作人をいかに揺るがすものであったか、彼はこの小説を訳すことでわたしたちに提示したのである。

第二章は、周作人とセクソロジーについて——彼がなぜイギリスの性科学者であり文藝評論家でもあるハウロック・エリスに生涯傾倒したかについて考察する。彼が五四時期の寵児として、とくにその名を馳せたのは1918年に発表した「人間の文学」によってだった。この文章は、新文学運動の聖典になる。それは「女性」と「こども」の発見という近代的な人道主義的立場によって、時代の求める潮流と合致したからである。その発見には、西洋の近代性科学の思想が大きな働きをしている。ただそこにも、第一章で扱った周作人の女性問題への注視がいかにして生まれたかということと同様、やはり極めて個人的な契機が潜んでいると考えた。そこで周作人が30年代に書いた自述を手がかりに、彼がエリスそしてフロイトの言説によっていかに蒙を啓かれたか、そこからいかにして、自己像を再構築し、アイデンティティを獲得していったかを明らかにし、彼が幼少時に聞き知った母親の不在という違和感を、のちに、エリス『性の心理研究』に出会い、自己を性科学によって解剖したことが、エリスを生涯の師とするきっかけとなったことを指摘する。母の不在の認識は、青年期の失恋つまり近代的恋愛同様、周作人にとってもうひとつの近代との出会いだったのである。

第二部は周作人とその文学、とくに文章にあらわれる悲哀への感応について。

第一章では、1908年、東京で発行された中国人留学生による雑誌『河南』に発

表された彼の初めての長編文学論「哀絃篇」を取り上げる。この一編は魯迅「摩羅詩力の説」と相互補完の関係にある。彼らふたりがこのような文章を書いた意図は、他国の亡国を嘲笑うような中国人に悲哀を悲憤に変えて立ち上がる、いわゆるロシアやハンガリーを始めとする亡国の民、弱小民族の声を伝えるためであった。だが同じ目的、同じ経緯を経ていながらも、魯迅は悲哀を反抗のエネルギーに変える点に着目し紹介するのに対し、周作人は国民が「覚悟」しないのは「悲哀」がないためだとし、「悲哀」から生まれる「哀音」がありさえすれば、国は存続すると説く。処女作としての文学論に、周作人の文学的感性の特徴のひとつである「悲哀への感応」がこのときすでに表れていたことを明らかにする。この「悲哀」の情感への傾斜が、十数年の時を隔てて『自分のはたけ』『雨天の書』の序跋に同じように出現する。「摩羅詩力」の垂流にすぎないようなこの一編は実はオスカー・ワイルドの『獄中記』の悲哀に周作人が感応し、その悲哀の感覚に沿うように東欧の詩人の声を中国に伝えたのだということ、また、『獄中記』の中国における最初の紹介であったことも指摘する。しかしなによりもこの文章は、さまざまな文章——他人の言説を引用することで、自己の主張をするという周作人の初期の表現方法が見られるという点で、いままではあまり顧みられなかったものの必要な意味を持つ一編なのである。

第2章は1929年に上海北新書局より上梓された彼の唯一の白話詩集『過ぎ去った生命』を取り上げ、熱狂のあとに訪れる悲哀、無力の感について考察した。彼の新詩が発表された当時（1918年）の世評は新しい詩のありかた、そして文学への期待に満ちたものであったし、彼の詩によって若いひとたちは伝統に縛られない詩をつくることを後押しされる。しかし、彼の詩に読み込まれた内容は、そういった期待とはいささかの齟齬をきたす。そこに現れるのはやはり彼特有の悲哀、そして無力である。彼が感じた悲哀は何であったのだろうか。当時、日本と中国を席卷していた新しい思想運動であるデモクラシー、新しき村という白樺派的理想主義の実験と周作人の関係を視野にいれながら、考察をすすめた。また、詩集に収録されなかった詩「北風」こそが、当時の周作人が新しき村という理想主義、ユートピア思想にどれほどの期待を寄せていたかを示すものであること、そうであるならばこの詩こそが、理想主義への夢も潰えた20年代後半になって纏めた『過ぎ去った生命』の標そのものでなければならぬことを明らかにする。

一見すると結びつかないこのふたつのテーマを繋ぐものは、先にも書いたように、「文抄」と称される、文抄公としての周作人の、引用を主とする文体である。文体、それはスタイルである。スタイルはいかにして生まれるか。それはその人間の個性、内的世界から形成されるものである。周作人の文章の大きな特徴として、古今東西問わぬ有名無名の人間の文章から「引用」という点があげられることは先に述べた。彼にとって引用とは（翻訳も含めて）何を意味するのかということについて初歩的な考察を試みたのが終章である。女性論を生涯書き続けるきっかけとなった周作人の性

的蹉跌。青年期の失恋からと思われたそれは、実は生まれたときから母性の欠如という形で存在していたことをエリスやフロイトの言説によって彼自身が認識していたことはすでに明らかにしたが、そのことと新体詩等に現れる人生に対する無力、悲哀への感応はどちらも彼のコンプレックスから来るものであることを明らかにしようとする。「引用」という手法は自分では直接的に物を言うことのできぬ彼が、他人の衣を借りて自分を援護するために用いる。他人の論を引用することでそこに自己を仮託して語るのである。翻訳も彼の場合は中国への外国文学や思想の紹介に止まらず、結局はそれにあたる場合がある。つまり直接的にはなんら関係のないように見える文章が、自己を語らない周作人の自己を如実に物語る傾向があるということだ。「引用」が実は彼の言説の隠れた代弁であり、他者の言説を借りて物を言うという行為が周作人自身のコンプレックスによるものであるという観点からその「引用」を読み解けば周作人の新たな像を開拓することができるのではなかろうか。

(論文審査の結果の要旨)

1917年から1920年代初期にかけて、中国の文学作品は、古典的な文語体から近代の口語体への急激な転換をみせる。この転換の中核のひとりとして、明治末期に日本東京での留学を経験した周作人がおり、かれの作品は1920～30年代中国の文体や思潮に大きな影響を与えた。しかし、1937年夏の盧溝橋事件後に多くの中国知識人が日本軍占領地域を離れる中で、北京残留を選んだ周作人は、1940年に対日協力政権の教育総署の最高責任者に就任、日本降伏後は懲役刑に処せられる。以後、1980年代末期に至るまで、中国語圏の文学史において、兄の魯迅が神格化されたのと対照的に、周作人の名は禁忌でありつづけた。最近20年の間に現れた研究も、文学史的評価や伝記考証に関するものが目につく。周作人の存在を敬遠したままでは近代中国の文化史を語れないことは、中国大陸の学界においてもすでに共通認識となっているはずであるが、現在に至るまで全著作集の刊行さえ実現していない。

周作人に対する歴史的・政治的な評価が優先されやすかった研究状況下において、論者の姿勢は、個々の作品に対する熟視、あるいは執筆年代の異なる著述を結ぶ脈絡の発見という点で、きわだった特徴を有する。以下、論述の順序にしたがい、女性や児童をめぐる評論、文学論、詩歌の三つの面に分けて、その達成を示すこととしたい。

周作人が「人間の文学」の価値を強調したこと、とりわけ女性やこどもの運命に対して強い関心を示し続けたことはよく知られている。その背景としては、19世紀末から中国へ流入した啓蒙思潮、あるいはハヴロック・エリスに代表される近代性科学の影響が従来からも指摘されていた。論者は、こうした大づかみな議論だけにとどまることなく、日記の記載や作品発表時に使用したさまざまな筆名、後年執筆した評論などを検討したうえで、美しい従姉の不幸な婚姻、あるいは母への満たされなかった思いなどの私的な体験こそが、周作人を女性論や児童論の執筆へとつき動かした契機であると指摘する。大量の作品を読み解くことによって示された、説得力のある見解である。

論者の博覧は、1908年、周作人22歳のときに書かれた「哀絃篇」など2篇の文学論に対する調査で、最も成果をあげている。1906年の来日以降、いかなる西洋近代の書物を読んで利用し、さらに本人の見解を加えて文学論を著したか。論者は、周作人が東京で入手もしくは閲覧可能であったと思われる、英文による文学史・文学作品を徹底的に調査し、「哀絃篇」が「まるでモザイクのように」それらを翻訳し利用していることを実証してみせた。引用であることを明記しないまま中国語訳されている場合が大部分であるのみならず、所蔵先の少ない文献からも引用されており、作業にはかなりの労力が費やされている。こうした調査がおこなわれたことで、明治日本における洋書輸入を通じ、西洋の知がどのように中国へも拡散していったか、具体的に示されるようになった。さらに、若き周作人が「哀絃篇」に盛りこんだ悲哀への傾斜が、後年作風の変化した著述においても、序や跋に「徽のように現れる」連続性は、

これまで見逃されてきたものであった。

上のような周到な調査は、周作人による口語自由詩を検討するにあたって、有効にはたらいだ。1919年に口語自由詩を書き始めて以来、周作人はひとつの詩を中国語・日本語のふたつの言語で発表することがしばしばだった。論者は、周作人のロシア十月革命に対する恐怖、武者小路実篤への共感を手がかりとしながら、1929年の詩集『過ぎ去った生命』に収める詩篇について、いくつもの新しい読みの可能性を示す。たとえば、過去ほとんど注目されなかった詩「北風」は、1906年に兄魯迅が丸善で購入したギリシア神話概論の内容と結びつけることで、じつは日本の「新しき村」が掲げる理想へのオマージュとして書かれたことが見出される。周作人における日本は、あまりにも自明のこととしてあつかわれ、両者の影響関係を深く掘り下げた研究は、まだ多くはない。本論は、明治大正期日本の出版物、あるいは当時の日本が欧米から輸入した文献と周作人の作品を綿密につきあわせ、確実な指摘をおこなったものとして高く評価されねばならないだろう。

以上の全体を貫く特徴として、論者が強調するのは、古今東西の作品からの引用を多用し、そこに自らを託して語ろうとする周作人の態度である。終章では、それを証拠だてるため、兄魯迅における引用の姿勢との対比が試みられている。まだ周到な議論がおこなわれているとはいいがたいけれども、興味深い着想である。

全体をとおして、引用された周作人の諸作品の日本語訳も含めて、平明で読みやすい論述となっている。論者が、既往の研究の方向性にあきたらず、これまで軽視されてきた周作人の原体験について具体的に細部まで指摘したことも、高く評価される。そのことは同時に、時代思潮との影響関係を薄めすぎてしまったのではないか、という印象も与えないではない。また、周作人のように毀誉褒貶の定まらない人物の場合、論者がいかに過去の評価・研究の流れを整理するかの詳しい解説がなされていれば、読む側にとって有益だったであろう。

周作人は、中国という一国の枠の中でとらえることが困難な人物の代表例であり、まさしく論者が試みたように、19～20世紀東アジアにおける西洋受容、日本の伝統と近代化、中国の土俗と近代化、日本帝国主義による占領と被占領、それらを総合する視点をもつことではじめて全面的な了解に到達できる作家である。さらに、かれは中国の民俗研究、文学史研究においても草創期の学者であった。本論を基礎としてさらに研究の範囲が拡大され、20世紀中国における周作人の役割が、いっそう正当に評価されるようになることを期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2013年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。